

山崎郷土報

NO. 110

19.9.9

兵庫県宍粟市教育委員会
社会教育課内
山崎郷土研究会
電話62-2000

宇野正碓先生を偲ぶ

当山崎郷土研究会員として、長らく郷土研究に精魂を傾け、本会報にもたびたび投稿していただきました宇野先生が本年五月に亡くなられました。氏は昭和三十三年六月に創刊号が発行されたこの郷土会報に千種鉄について投稿されて以来、ご高齢になられた今日まで、いや命が尽きる寸前まで旺盛な研究心を持ち続けて来られた尊敬すべき先生でありました。今回先生のご偉功を振り返ってみたいと考え、まず、本会報に出稿された内容を題名だけの紹介になりますが、ここに掲載します。

- 第一号 宍粟鉄について 昭和三三・六
- 第二号 史料採訪報告 三三・一〇
- 第三号 宍粟鉄の販路 三四・三
- 第四号 揖保川・高瀬舟聞書(一) 三四・七
- 第六号 揖保川・高瀬舟考(二) 三五・二

目次

宇野正碓先生を偲ぶ	………	会報部	1
前会長	森本 一二		4
会長	春名 俊夫		5
会報部	河本 雅視		6
会報部	片山 昭悟		6
鳩屋孫右衛門について(一)	下村 哲三		7
エッセイ「物の怪」	浅田 耕三		13
山崎町歴史街道(十三)	会報部		15

- 第七号 揖保川・高瀬舟考(三) 三五・五
- 第一〇号 岸田発掘古銭報告(山高地歴班) 三六・五
- 第一二号 揖保川・高瀬舟考(四) 三七・二
- 第一四号 揖保川・高瀬舟考(五) 三七・九
- 第一七号 宍粟郡の近世産業(一) 三八・一〇
- 第一八号 宍粟郡の近世産業(二) 三九・二
- 第一九号 宍粟郡の近世産業(三) 三九・六
- 第二〇号 宍粟郡の近世産業(四) 三九・一〇
- 第二五号 宍粟鉄山の経営(一) 四一・七
- 第二六号 1 鉄山師千草源右衛門 1
1 千草屋源入居士と貞把居士 1
四一・一一

第二七号	千草銅と長船鍛冶 備前景光・景政の場合		
第二九号	宍粟鉄山の経営者(三) ― 鉄山師・鳩屋孫五郎―	四二・四 四二・一一	第九八号 路傍観察(二) 世紀の境を挟んだ考現誌 一三・九
第三三号	鉄山炭山の指定	四四・四	第九九号 路傍観察(二) 世紀の境を挟んだ考現誌 一四・四
第三六号	揖保川の川魚漁業	四五・四	第一〇〇号 屈伸し蛇行する劔 一四・九
第四三号	江戸末期の山崎の人口について	四八・一〇	第一〇一号 路傍観察(三) 世紀を挟んでの考現誌 一五・四
第六六号	近世宍粟郡の耕地造成 ― 田井村畠田の場合(上)―	六〇・九	第一〇二号 地域史随想 北播磨の国あれこれ 一五・九
第六七号	近世宍粟郡の耕地造成 ― 田井村畠田の場合(中)―	六一・三	第一〇三号 地域史随想 北播磨の紙漉き業 一六・四
第六八号	近世宍粟郡の耕地造成 ― 田井村畠田の場合(下)―	六一・九	《杉(楢)原・海田・都多杉原の紙屋》 第一〇五号 地域史随想 高貴の出自に 一七・四
第七四号	宗門人別帳(上ノ下村の場合)	平成元・九	第一〇六号 地域史随想 高貴の出自に つながる人たち(二) 一七・九
第八八号	山崎町の変遷と今後(一) ― 街区部の歴史・地理的視点から―	八・九	以上のように、昭和三三年から今日までの五〇年間に、この会報に三六回も研究成果を発表されるという偉業を残されています。改めて宇野先生の郷土研究に対する熱い思いと、それを伝えようという熱意を感じずにはいられません。
第八九号	山崎町の変遷と今後(二) ― 街区部の歴史・地理的視点から―	九・四	また、第八八号から一〇一号では山崎の街区とその周辺について、近世から近代、そして現代へと町並みの移り変わりや、高度経済成長の中で変貌し、空洞化する商店街と周辺の国道、県道沿線の刻々と様子を変える様を歴史・地理的視点から具体的に検証しておられます。この検証は今後のまちづくりの方向付けの礎と
第九〇号	山崎町の変遷と今後(三) ― 旧町周辺部と郊外地の住宅―	九・九	
第九一号	山崎町の変遷と今後(四) ― 旧町周辺部と郊外地の住宅―	一〇・五	
第九二号	山崎町の変遷と今後(追補)	一〇・九	

なる重要な視点であると改めて感じ、記録し、それを書き残すこととの大切さを訴えられているように思えます。

つぎに、宇野先生が発行または部分執筆・編集等をされたものを挙げてみますと左の通りであります。たぶんこれだけではなく、歴史研究の諸文献にも執筆・寄稿されていることは存じながらもつぶさに把握できていないことをもどかしく思っています。

- 昭和四一年一月 『近世千草鉄山史料上』 B 6 版二二八頁
- 昭和四三年三月 『近世千草鉄山史料中』 B 6 版二二〇頁
- 昭和四五年一月 『近世千草鉄山史料下』 B 6 版二三七頁
- 昭和五二年三月 『山崎町史』編集委員長 A 5 版一三一六頁
- 昭和六〇年一月 『本稿六粟郡史の研究上』 B 5 版一七一頁
- 昭和六〇年一月 『本稿六粟郡史の研究下』 B 5 版二〇三頁
- 昭和六二年一月 『語り継ぎサロン一号』
- 平成四年二月 『語り継ぎサロン六〇号』月刊 B 5 版各四頁
- 昭和六三年一〇月 『日本地名大辞典 兵庫県』角川書店部分著
- 平成元年四月 『藩史大事典 第五卷近畿編』雄山閣 部分著
- 平成元年四月 『六粟鉄山並金屋鑄物史料』 B 6 版 三二二六頁
- 平成四年 『揖保川高瀬舟史料』 A 5 版 二八八頁
- 平成五年一二月 『安富町史』編集委員 A 5 版全二巻
- 平成六年七月 『揖保川高瀬舟史料補遺』 B 6 版八四頁

平成一七年一〇月 地域史栄光と影随想第一編『播磨北域の森と樹の文化』 A 5 版一五三頁

平成一八年 月 地域史栄光と影随想第二編『六粟鉄の軌跡を逐う』 A 5 版一二六頁

平成一八年七月 地域史栄光と影随想第三編『河川は住民の幹線動脈』《播磨の高瀬舟》 A 5 版一五三頁

平成一九年 地域史栄光と影随想第四編『播磨北域の紙漉きと木地師の技』未発行

先生は、平成十七年から着手された『地域史栄光と影随想』の最後の第四編をほぼ作り上げ、あとは校正というところまでこぎ着けた段階で永眠されました。こころざし半ばと先生自身は思っておられるでしょうが、我々にはよくぞここまで……と執念とでもいふべき先生の意欲に、偉業の大きさと合わせて、只々頭が下がる思いでいっぱいです。



宇野先生が発行された文献

さて、ここまででは先生の郷土史研究で紙面上に発表されたものを追ってみましたが、執筆のみならず、郷土史研究グループの育成など後継者を育てる取り組みや、文化財保護の取り組みも熱心にされてきました。

高等学校教員時代には、地理歴史研究部（地歴部）をつくり、生徒とともに古文書の解読や、現地を訪問し、古老にたずね、郷土の歴史や民俗を紐解く取り組みをされました。

また、昭和四六年には山崎町歴史研究会の会長になり、翌年から始まった『山崎町史』の編纂委員長として昭和五二年の発刊成るまで精力的に執筆・調査研究を重ねて来られました。その間、山崎町文化財審議委員長としても町内の遺跡や有形・無形の文化財の保存に向け調査研究にも携わられました。

山崎町からは、昭和四七年に「さつき賞」が、また、昭和五三年には「文化功労章」が授与されました。昭和五九年には兵庫県から「ともしびの賞」が贈られ、先生の長年の郷土史研究の功績が讃えられました。

宇野先生の功績をあげると枚挙に暇がありません。先生に追いつくことは無理としても、先生の郷土研究に傾けられた遺志を少しでも引き継ぎたいと思っております。

山崎郷土研究会が長らく発行を続けてられてきたことを顧み、会報部として一応のまとめいたします。

会報部長 大谷 司郎

次に、宇野先生と特に交際の深かったみなさんのコメントを掲載させていただきます。

宇野正徳先生との思い出

前会長 森本 一一一

宇野先生は、岸田明宝寺の先住でした、私の母方はじめ、在村親族の大半は 同寺の檀家であり、葬儀・法要等に導師として御勤め下さり、ご法話を頂き続けてきました。

先生は長く山崎高校に在職され、歴史クラブでは、郷土史を深く研究され、地元の矢原・須賀沢の古墳発掘などは有名です。

先生は自宅に郷土学習会を持ち、会報「語り継ぎサロン」を発行されていきました。これには私の「岸田出土の宋銭」はじめ、『金石文』や「高瀬舟」の研究を連載して下さいました。

先生は、昭和三十三年「宍粟郡郷土研究会」発足以来の幹事・編集者となられ、会報第一号の「宍粟鉄について」の連載以来、「山崎郷土研究会」と名称を変えた会報一〇八号に及ぶまで、千種鉄・高瀬舟などの主要研究の外、近年は身近な『路傍観察』に至る迄会報への最多寄稿者の内の一人でありました。

先生は、よく講演会に出席されると共に、現地、現物の視察研究を重視され、何回も私を誘って下さり、私もまた先生を車に乗

せ、西河内や音水谷の鉄山跡や、波賀の宝篋印塔めぐり等の旅をさせてもらいました。

先生について特に有難いのは、研究が製本されると、わざわざ来宅して手渡して下さった事です。晩年、車に乗られなくなつてからは、県道筋の郵便局へ届けて、電話で知らせて下さったので、そこへ頂きに行きました。

五月の初めです、私の「モリアオガエルの観察」のまとめを、先生のお部屋へ届けに行った所、奥様が出られ「今は不在していますので」とおっしゃったのを、うかつに「外出されているのかな」と思つて帰りましたが、それから間もなく、先生のご訃報を聞き、大変に驚き、お葬式に参列しました。

偉大な先輩、温かく指導助成して下さいました恩師、宇野先生のご厚情を思い浮かべつつ名残りは尽きませんが、お礼の言葉と致します。

宇野正碓氏から教わったこと

会長 春名俊夫

私は、明宝寺の門徒でありますので、宇野先生とは長い付き合いということになります。月参りで私宅にこられた時など、私の若かりし頃は常に話すこともなく過ごしていましたが、父が亡く

なり、父の後を私に寺の世話人となつてくれなにかと言われ、お引き受けしてから、もう二十余年になりました。月参りの時など、ときどき歴史的な話を伺ううちに、ある日「語り継ぎサロン」という冊子を下さいました。それからはいろいろな本を貸していただき、勉強をさせてもらいました。また、『地域史随想栄光と影』第一編より第三編まで出来上がるとすぐに来宅して届けてくださいました。

この本の膨大な史料を基に現地調査をして書かれているのに驚きをおぼえました。先生は、亡くなられるその日まで地域歴史の研究に費やされたと云つて過言ではないでしょう。

私が、先生に特に丁寧におそわったのは「歎異抄」でした。はじめから終りまでそこに書かれた精神と言うか、真髓を月参りの度に長い時間を掛けて聞かせていただいたものです。先生の本職と言えばそれまでですが、聞いた者に伝えることのできるなにかがあつてできることだと思つています。

偉大な先輩であり、温かく指導して下さいました先生をわすれることなく、教えてくださったものを大切に、さらに後世に伝えて行く事を誓い一文とします。

宇野先生の思い出

会報部 河本雅視

平成二年、山崎町教育委員会へ勤めていた時、先生に老人大学の一般教養講座に講師として「長水城に関するお話をして頂けませんか。」とお願いをしたときの事です。先生は、『中世の資料はあまり見つかっておらず、本当の事が分かりません。江戸時代の山崎の事をお話しましょうか。』と言って下さり、お願いをしました。そこで、『皆さんにより分かりやすくスライド映写を利用しましょう。』と言われ、カメラを持ってお供しました。行き先は大雲寺、興国寺の墓地。たくさんのお墓が並んでいます。先生は苔生した古いお墓を拭いながら一基一基見ていかれ、「あつた！これが江戸時代鉄山経営者鳩屋の墓です。」と言われ、また、これは千草屋等、また、藩医の稲岡秋平の墓、そしてまた、興国寺墓地では、藩主池田恒元時代の家老宮野頼母や淵本弥兵衛の墓を教えて頂き、それらを写真に納めました。そして、講座の日皆さんにお話しして頂きましたが、私はこれらのことを通して先生の歴史に対する考え方、そして、史実に基づく歴史観を持つことの大切さを教えて頂くことができました。

生涯調査と研究を買かれた先生へ

会報部 片山昭悟

宇野先生の代表的な調査研究テーマは、宍粟鉄・金屋鋳物師・高瀬舟・木地師でいずれも宍粟が原点である。

とくに、たたら製鉄、木地師の研究では、日本の第一人者として知られる。

先生より金屋鋳物師長谷川氏の梵鐘調査で、ご指導をいただいた。私が宍粟の梵鐘について調査することができるのも、先生との出会いからである。先生は一生涯調査と研究を買かれた。学問に対して真摯な先生で、現地を訪れて、聞き取り調査や実物を見られ、そして史料にあたり、記録され、発表される調査研究の基本を直接ご教示いただく機会に恵まれた。

今年の四月七日（土）に宍粟の木地師調査で一宮町三方町の宍粟市歴史資料館にバスで来られた。

ご一緒できたのが最後であった。ご冥福をお祈りします。

鳩屋孫右衛門にひつと(1)

下村 哲三

はじめに

宝暦の昔「御運上銀も十二貫目余り、年久しく御上納…」とあるように、出石川岸問屋の「鳩屋」は、運上銀の納付額から逆算すると、毎年一千兩を超す利益を上げていたと考えられます。

当時、宍粟での二大豪商と言えば「千草屋」とこの「鳩屋」であると云えます。

波瀾万丈で十三代続いた鳩屋さんの盛衰を、私ごときがあれこれ書くことは誠に失礼かと感じながらも、齢を重ねるにつれて、今までお世話になったことへの感謝とお礼をどこかで申し上げたく、失礼なところもあるかもしれませんが、お寺の過去帳や墓石の銘文、関係する古文書などから、私なりに集成させていただきました。

一、鳩屋の系譜

初代 太田 茂右衛門尉義成

上野国太田(群馬県太田市)城主新田左京太夫義則の八男として天正一五年生まれる(禄高三千石)

元和元年太田城主二九歳で大阪夏の陣へ出陣 その後徳川川方の隠士として西国方の情報活動を行う

丹後国宮津城主京極氏・江州大津城主建部内匠に仕官

山崎池田輝澄公に山崎で医業と拾人扶持を拝領の処輝澄公旗本三家に仰付られた、それ故この事無く、その後林田建部奇徳公の誘いで鳥狩りに出て、鳩が多く獲れたため御機嫌により鳩屋の屋号拝領 建部公の山崎城請取の時二十日ばかり御滞在

二代 太田 九郎右衛門義氏

茂右衛門の長男 人生の後半は雑木・白箸・木炭・葛薪の事業 山林の経営(労働)が厳しいため因州岩井湯で療養中没

同人妻法名令妙松信女 元禄三年庚午九月晦日没す

出生当郡奥小屋村住人長谷川六郎兵の妹、この人の先祖は長水城宇野家四天王の長谷川五郎兵衛なり

三代 太田 六郎右衛門

茂右衛門の次男、先代の事業継続(大規模)に

同人妻は法名清閑七三歳、生まれは姫路、美作浪人和田仁寿の娘 次女の姉(妙教)に子がないたため養子となる。

四代 横野 孫右衛門宗教

愛宕神社勧請奉還す。木炭・鉄山経営の除災祈願のため宝永七年忠八郎中鳩屋の分家を起こす。

元禄七年東出石に高瀬舟の問屋を始め、代官所の公用米その他宍粟の産物の運輸を行う。

妻石塔は鳩の五百井六右工門の娘(今鳩本陣)なり。

五代 鳩屋 孫右衛門

先代宗教の次男・先代の事業を継続する。天文元年鳩屋善次郎分家を起こす。播磨屋・元文三年鳩屋三五郎分家を起こす。浜の屋 宝暦六年千草屋没落後の製鉄とその運輸の動脈だった揖保川の支配権を手にする。

妻志満は山崎米屋次兵工の娘

六代 鳩屋 重平治光保

先代の事業を継続・安永七年長男孫三郎の一周忌供養のため観音像祀る。宝暦から鉄山の繁盛期に入る。

七代 鳩屋 重左衛門

先代の事業を継続・天明の飢饉・この人山崎町網干屋伊達平兵工の子で養子となる。重太郎の未亡人と結婚

八代 鳩屋 茂 藏

六代光保の次男で先代の事業を継続・天明の大飢饉救済す。寛政十二年私製の鉄山札発行六粟で初めて銭一匁

九代 鳩屋 孫左衛門

十一代孫五郎の子で本家を継ぐ(重太郎(孫三郎) 本家筋)妻加ち山崎家中立花の娘

一〇代 鳩屋 弥兵衛

七代鳩屋重左衛門の子 没三〇才

十一代 鳩屋 孫五郎

七代鳩屋重左衛門の子 文政十二年松平右近将監より銀三〇貫拜円(一億円) 返済弘化二年の口上書

妻 網干長松村金田仁九郎の娘

一二代 鳩屋 孫右衛門

孫五郎の長男・鳩屋が鉄山業離れる〔天保七、弘化三年〕舟問屋の業務は播磨屋と中鳩屋に移る。

私塾を開く(教師) 江戸末期、明治初期

観音堂の数珠箱を再生させる 明治十三年須賀沢村戸長

妻む津は美作国吉野郡乘子村篠井前左工門信兼の娘

一三代 横野 逸 作

妻は佐用郡佐用村山田下野六量勝重保の娘かめの

一四代 横野 直 二

銀行業務

妻房子六栗郡菅野村高下駒井家より

二、鳩屋の出自

鳩屋の先祖は上野国(群馬県)新田荘を本拠とした新田義重(建仁二年、一一二〇)の流れをくみ、新田義貞の後裔なり。降つて

新田左京太夫義則は、上野国館林藩榊原康政公の出城太田城主で、その太田茂右衛門義成は八男。三千石の禄高を受ける。この太田

茂右衛門が鳩屋の初代当主となる。

館林領人、山崎町史の記載に依る本多候が参勤交代の出発と帰国時に出仕されるメンバーの一人に館林領人鳩屋孫四郎

の名が在るのは鳩屋十一代目鳩屋孫五郎のことであつて先祖が館林藩榊原康政公に仕えていた。

宝暦六年千草屋没落後の製鉄とその運輸の動脈である揖保川の支配権を手にする。

その理由は、以下の三つが考えられる。

(一) 幕府(山方所)の重要物資である製鉄・年貢米

(公用米) 木炭・木材 特に山方所の掛け屋となって普請、納入品、もちろん金融を一手に引き受け、毎年一千万を越す利益を受ける

(二) 鳩屋の組織が拡大充実したこと(本鳩・中鳩・播磨屋・浜の屋)

(三) 揖保川水系の水運に一族が努力する。特に高瀬舟のもめごとでの処理をした。

つぎに鳩屋の親族関係を追ってみる。

(イ) 吉間村(吉島村)の長谷川家||長水城宇野家の四天王の一人で長水城落城後吉島に移り揖保川の荒野を開墾して新開百三十石の田を作り、土着して庄屋となる。

(ロ) 下野村の小林家||大地主で舟の間屋

(ハ) 馬立村の松本家||大地主

(ニ) 龍野町の住吉家・浜の屋・前田家||舟の間屋

(ホ) 鶴村の井筒屋||舟問屋

鶴村の五百井家||本陣大名などの泊まる宿泊所

(ヘ) 網干村の成田屋・金田家・赤穂屋||舟問屋

(ト) 尾崎村の小川屋||塩の間屋

(チ) 兵庫村(神戸市)の北風勝右衛門||全国的豪商(北前舟)

(リ) 西の宮村の八馬家||酒造業

鳩屋の経営の浮沈を考える上で何点かの事柄をあげてみる。

上野国館林藩主松平右近将監武厚公六万千石から天保七年(一八三六)融資を受ける。

十代目鳩屋弥兵衛・十一代目鳩屋孫五郎の時代より早くからすでに経営のむずかしさが見え隠れしていたようで、直接問題となるのは、天保期(一八世紀中頃)の物価変動と鉄価の下落であった。なお同じ頃、兄弥兵衛が重病に、さらに死亡するという不幸に襲われている。

後継者の弟孫五郎は運上銀の減額の願出もせず必死に努めていた。幸いなことに宍粟郡の村と千草谷の村の支配者が上野国館林藩松平右近将監公(出張所は三木町)となり、かつて天明飢饉の際には私財を投じて労働者の救済に尽力し、只今は鉄山経営の不如意に苦勞している事情を承知されていたこともあり、是まで通り鉄山経営が立ち直るようにとお手元銀三十貫目を拝借できるようになり、一息ついて齊木鉄山口や岩野辺での鉄砂利採取が出来るようになった。

又、融資の理由として考えるべきことが外にもあった。

それは鳩屋の先祖が上野国(今の群馬県太田市)館林藩でその昔(元和年間)支城であった太田城主として藩政に努力されたことなども考えてのことと思う。

三、鳩屋の登場

鳩屋は古い家柄で、元和元年より寛永・正保まで三十三年間は初代太田茂右衛門尉義成が、館林藩の支藩である太田城主の八男（三千石）として、大阪夏の陣以降徳川方の隠士として、西国方の情報活動を行いつつ八男として生まれの身を考え、西国大名との付き合いをいかして、この地に子孫の生きる場として地盤を基く。

二代目太田九郎右エ門義氏、三代目太田六郎工門（後九郎工門）の時代は、雑木・白箸・木炭・葛薪の請負を事業として着々と財の蓄積をなし、四代目横野孫工門宗教の代からの揖保川の東岸、須賀村（東出石）に元禄七年より舟問屋を始め、年貢米・木炭・材木板・白箸・葛籠・鉄などを扱っていたが、鉄山経営は、まだ千草屋に圧倒されて、中・小鉄山を、その頃は経営していたのであろう。

ところが、千草屋倒産後は

「御運上銀も十二貫目余、年久しく御上納……」

という繁盛振りで、山方役所へもよく食い込み、掛屋となつて普請、納入品、もちろん金融を一手に引き受け、飛ぶ鳥落とす勢いに成長する。運上銀が「十二貫目余」といえば、天保元年の金一両は銀六十二匁八分だったから、約百九十両になる。この運上銀から推算すると、鳩屋は毎年、千両を越す利益を上げていたと考えられ、その繁盛振りが浮き彫りになってくる。また、鳩屋が経営した鉄山には高羅、一の谷、内海（以上は千種）、鍵掛、赤西、



鳩屋があった付近

音水、滝谷、万ヶ谷、瀬戸、駒前、野々住、溝谷、三久庵、広路、榎木山、(揖保川筋)があった。

この鉄山に關係のあつた村々は、千種 西河内、河内、河呂、岩野辺、室、西山(千種町のほとんど全部)。揖保川筋では、原、引原、野尻、飯見、上野、皆木、有賀、芥木、安賀(波賀町のほとんど全域)、三方、公文(一宮町)にわたる。もちろん、これらの鉄山や鉄穴流し場を一齐に全部稼動させていたわけではなく、せいぜい四カ所くらい程度であつたかと思われるが、それにして、誠に際立つた勢力である。

さて、この頃の鉄価はと見ると 宝曆十一年(一七六一)ごろから地方直売の増加などで、やや持ち直していたが(千草屋も、もう五年ほど辛抱できていたならば:と思われる)安永九年(一七八〇)十一月、大阪に「鉄座」が開設されると、再び急落を始める。鉄座は老中田沼意次の物価引下げ策の一環として設けられたが、従来の自由販売を禁止し、全国の産鉄を大阪問屋に集荷して鉄価を操作、地方直売は鉄産地の地元を除いて厳禁した。そして鉄座から、十、十三%の運上銀を召し上げたのである。

これでは自由取引が絶たれて鉄価が下がるのは当然。そのうえ、その機構がむちゃだった。まず、鉄問屋へ入荷した鉄価は、そのまま鉄座に売り渡し、買入価格は鉄座が決定、代銀は問屋へ即銀払い。又、仲買への売り払い値段も鉄座が決定し、仲買から銀座への支払いも即銀となる。すべてキャッシュ主義だ。鉄問屋は銀座から即銀払いだから有難いが、仲買はキャッシュで即座に

払わねばならないから、たまつたものではない。現銀なしでは商いが出来ぬ。そのうえ、鉄座が用意した資金が、両替商から借り入れたわずか五千両と言う少額だったから、鉄問屋の即銀払いも、はかばかしくいかなない。加えるに、せっかく盛んになってきた地方直売も禁止とあつては、鉄の売買が停滞し、鉄価が急落するのは当然だ。

商いを知らぬ田沼幕政の統制、強制は、しばらくして頓挫する。天明五年(一七八五)十月には規制の手直しがあつたが如何ともしがたく、天明六年の意次失脚と共に、翌七年九月、鉄業者の猛反撃を受けて廃止されてしまうのである。残つたのは、暴落した鉄価だけだった。

この間の出雲の鉄をみると、鉄座開設当時の鉄七十三匁、下鉄四十四匁五分が、天明5年には、それぞれ四十八匁五分、二十九匁五分に下落している。また、安芸山県郡の鉄も、四十匁四分が三十一匁まで急落している。

さて、鉄座が廃止されると、大阪問屋を通さぬ地方直売が急増する。この方が値が良かったせいで、一方、それにともなつて大阪への鉄入荷量は減少の一途をたどる。大阪の鉄売買は消沈し、儲けが少なくなるにつれて、その分を補うために仕入れ値を叩きに叩く。大阪の鉄価はなお下落し、その分地方直売が増えていく。この悪循環によって、大阪ではなりふりかまわぬ商売が横行し、ニセ物、イミテーションは「商いの常識」になつてしまうのである。

こういうさなかにあって、なんといっても小さな地場資本にすぎなかった鳩屋の破局がやってくる。「百年来」鉄山を営し「御運上銀も十二貫余」を年々納めてきた鳩屋が、天保後半（一八四〇年ごろ）に倒産寸前に追い込まれるのである。その頃の文書による

「松平右近将監様、お手銀の御拝借三十貫目おおせつけなされ、ありがたき仕合せにて……。」

というふうには、鉄価下落から経営難に陥り、支配所（東播三木）から銀三十貫を借りるまでに困窮する。掛屋だから金を貸すのは当たり前だが、反対に借りているのだから世話はない、ところが、松平将監が支配替え（転勤）になり、急拠、拝借銀を返済しなければならぬ仕儀になる。

ということから、本多肥後守の家臣、名嶋庄太夫という役人から二十七貫目を借り、家産を足して返済するが、利息がかさみ、二十七貫目の元利合計が六十二貫目にふくれあがり、返済のかわりに鉄山を譲れと迫られる。そのときの嘆願書には、「庄太夫殿、私旧来の鉄山に執心かけられ、欲取られ候段、仕官の身にあるまじきいたし方と、甚だ苦々しく存じ奉り候」と庄太夫の行状を批判して「おとりなし下されたく」と述べている。ではなぜ、庄太夫は「鉄山に執心」したのか。鉄価は今（天保9年ごろとおもわれる）前代未聞の値段にて、百年来にもこれなく、一駄につき三〇匁内外の値段に跳ね上がっていたからだ。つい先ほどまでは「三十二貫一駄に付き八十匁内外」だったのだ。（八十匁と

いえば一見高価に思えるが、江戸後期の物価から見れば、安価である）

それにしても、鳩屋は残念で仕方がない。なぜなら、天保七年に鉄山経営を退いた時「銀主等でき候節は、鉄山相戻すべき申し合わせにて鉄山譲り」おいたのに、誰も返してくれないのだ。当たり前であろう。困窮して鉄山を手放したが、銀が出来れば鉄山を返してもらう……という手前勝手な証文が、そうやすやす通るはずがない。しかも鉄価は「前代未聞」の暴騰だ。

この紛争が、どんな結末になったかは分からないが、鍵掛山鉄山だけは弘化三年に返ってきたことが文書に残っている。それにしても、十年に及ぶ長い争いであった。

なお、姫路の釘問屋「辰己屋」福永家の「勘定帳」を見ると、鳩屋は文化十年から弘化三年までの二十年間に、十四回にわたって借銀していることが分かる。帳面には「鳩屋取替銀」「貸付銀」とあって、返済は「預かり銀」形で5回あるが、その総額は借銀四十三貫六百三匁八分返済、十四貫四百四十六匁八分になる。あとどれだけ返済できたのであろうか。

四、千種からの鉄の道

江戸時代の「鉄の道」に触れておこう。備前鍛冶が活躍した中世末期までは、千種の鉄は西へ顔を向けていたが、近世初頭から山崎に問屋が発達しはじめると、鉄の顔は東へ向く。図を解説すると、

①天児屋・鍋ヶ谷―ミソギ峠―大茅―吉野川―吉井川―備前福岡長船（あるいは、千種―志引峠―吉野川）

②天児屋・鍋ヶ谷―千種―内海―有賀
杉ヶ瀬―東出石
田井―西出石

③揖保川筋
杉ヶ瀬―東出石
田井―西出石

④天児屋・鍋ヶ谷―千草―内海―岩上峠―葛沢―西出石

⑤千草―下河野―塩地峠―塩山―西出石

⑥千草―鷹巣―小茅野―白口峠―葛沢―西出石

の四つのルートがあった。①は、前述のように中世末期まで、②は岩野辺の鉄山（荒尾、内海）に多く使われ、④は西河内、河内の鉄山（天児屋、高羅など）の搬出路であった。それが幕末から明治に掛けて志文川沿いの塩山に運送問屋ができると、千種川沿いに下って下河野から塩地峠越えにかわった。あとは運送問屋が山崎まで運んでくれる仕組みで、登りは塩地峠だけという大変楽な往来になった。

エッセイ 「物の怪」

浅田耕三

今日はお盆の十六日、昨日は群馬県の館林で気温四〇度を越し、北関東は軒並み三七度以上の猛暑日だったそうで、日本列島のうち三五度以上の赤く塗られた都道府県は四〇、北海道まで赤く、気象予報士は「列島焦げる」とあまり耳慣れぬ言葉で暑さを告げていた。

今日もまた同じような暑さにあえいでいると電話があつて、郷土史会報に早く何か書くようにと催促を受けた。今号は何も書かぬつもりだったのだが、それも悪いような気がして暑熱の中、ない頭を絞って少々おどろしい一計を思いついた。

今から一〇〇〇年程昔の平安期に書かれた日本の古典文学には実にたくさんの「物の怪」（もののけ）が出てくる。一番多いのは鬼だが、ほかにももろもろの魔性のもの、怨霊のたぐいが『今昔物語』や『宇治拾遺』『日本霊異記』などにぞくぞくと現れて、中には随分面妖なものもあるが、リアルなもの、ぞくつと鳥肌の立つような話にも出くわす。

今日はその中で『源氏物語』に出てくる「物の怪」について書いてみようと思う。

『源氏物語』の中の物の怪は専ら人間の霊魂であるが、この霊

魂には二つあって、一つは死霊だがもう一つは生霊なのである。死霊は現在の怪談にもよく出てきて珍しくも何ともないが、生霊というのは現代人にはあまり馴染みがなく、つまりそれは生きている人間の霊魂で「いきりよう」又は「いきすだま」という。

『源氏物語』という大長篇小説の主人公・光源氏の愛人の一人に六条御息所（みやすどころ）という昔、東宮妃（皇太子妃）として時めいたが、今は夫に死別している美しい女性があった。若くて類稀な美人で教養品位も超一流だったが、光源氏に言い寄られ、この天下一の色男の魅力には抗すべくもなくついその愛人になつてしまふ。

しかし、何しろ光源氏は名うての色好みで女出入りの絶えぬ男。その愛人になつた時から御息所の苦悩がはじまる。高貴な身分の女性に似合わず、いやその身分ゆえかも知れぬが、彼女はたいそう嫉妬深く、また厄介なことに誇り高い女性ゆえ、源氏の際限もない女遊びに苦しみ人知れず瞋恚（しんい）の炎を燃やす。ついに源氏の正妻で今を時めく左大臣家の姫君葵の上（あおいのうえ）が源氏の子を身ごもり、大変な難産で苦しんでいる軀へ怨霊となつて取り憑く。そして激しく産婦を苦しめる。この時代は病氣も怪我も出産も、その治療法は一にも二にも加持祈祷で高名な修験者（しゅげんじゃ）や高僧が呼ばれ、護摩を焚いて平癒を祈つた。

この葵の上の安産祈願も広い邸内がその祈祷僧たちで溢れ、読経の大合唱・護摩の煙がもうもうと立ちこめていた。

光源氏が見舞いに訪れ、葵の上の枕元にすわると、苦悶の表情の葵が、いきなり源氏に、焚かれる護摩の煙と読経の聲が苦しくて耐えられぬので、もつとゆるめてほしいと訴える。源氏ははつとする。葵の発したその聲が紛れもなく御息所の声なのである。そして産褥で呻吟する産婦の物腰もいつの間にか御息所その人になつている。祈祷を受けて苦しんでいるのは葵に取り憑いている御息所の霊であつた。

かくて葵は出産後しばらくで死去し、赤ん坊は助かる。のちの夕霧である。一方御息所は自分の霊が葵に取り憑いているなどとは全く気づかないが、目をつむるとありありと葵の産屋が網膜に映り、多くの祈祷師が読経しているのが見える。

そして自分の髪と衣服に護摩を焚く時に火中に投じる芥子（けし）の實の匂いがしみついていのに愕然とし、あわてて衣服と髪を洗うが強い芥子の匂いはなかなか取れない。

このあたりの簡潔でしかもいきいきとした描写はさすがに『源氏物語』でその不気味さ、ゆするつきという漆器に湯をたたえ、懸命に長い髪を洗う御息所のあわれさが惻惻（そくそく）として胸に迫る。

御息所の生霊、死んでからは死霊がこのあとも源氏の妻妾たちに取り憑いていくのだが、一夫多妻制の平安貴族社会に生きた女性、一人の男に八人も九人も妻がかしずかせられ、しかもいつその夫から捨てられるかわからぬ女性の不安や苦悩がこのような霊魂となつて凝縮しているのである。

『山崎歴史街道』(十四)

●山崎の史跡巡りをしませんか●

会報部

四十七 塩山銀山跡(城山) 所在 山崎町塩山

塩山に銀・銅を産出していた所があります。そこは土万小学校を過ぎ、一キロメートルほど北上した所で、銀山という隣保があり、その裏山に当たります。

山崎郷土研究会の旧史跡めぐりには、「ここ銀山は室町時代より盛んに銀鉱を採掘していました。そして、江戸時代には生野代官所支配となりました。明治以降も断続して採掘されましたが最近に至って廃坑となりました。」とあります。また、空襲郡誌には、「塩山鉱山は明治十三年の開坑にして、鉱区十万余坪、銅、銀を産し、一カ年の採掘高約一万四千貫内外なり。」とあります。

平成の現在はどうなっているかと、十九年一月当地を訪ねてみました。丁度年配のご婦人がおられ、親切に案内して頂きました。説明



銀山鉱山口

によりますと、昭和17、18年頃まで細々掘り出していたようですが、若い人達は出征し、或いは戦死し、働き手が無くなり閉山したようです。また、その頃にはトロッコ道があり、鉱山口から運び出された鉱石は選鉱され生野銀山へ運ばれたと言うことでした。

平成の現在では、鉱滓の捨て場や作業場、事務所の跡、トロッコ道の跡など変わり果てた痕跡を見ることが出来ました。

四十八 千種鉄の道「塩地峠」 所在 山崎町大沢

銀山跡からまた約一キロメートルほど北西へ進んだところに万合という所があり、そこに「史跡千種鉄の道塩地峠」の石碑が建っています。ここから千種町下河野(しもけごの)まで三、五キロメートルほどが塩地峠越えの山道です。現在車では越えません。

この塩地峠は山崎町の発展に大きく影響したと思えます。千種では昔からたたら製鉄を生産してきましたが、特に江戸時代には山崎町の有力商人が鉄山師として鉄山経営にあたりました。山崎町史など資料にみえる鉄山



塩地峠入り口

師には英賀屋、千種屋、米屋、龍野屋等22名の名が見られますが、後期に入ると大阪商人の資本力に吸収されていったとあります。

また、千種で生産されたちくさ鉄は、牛の背で運び、中には人の背をかりて千種側の下河野（しもけごの）からこの塩地峠を越え山崎まで運び出され、出石（いだいし）から高瀬舟に積み替えて揖保川を下り、網干を経て大阪方面へ運ばれたとありますが、中継地であつ旧山崎町はこれらの物流の上で大変賑わつたと思えます。

何気なく通り過ぎていく一つの地点も歴史的な大きな重みを感じます。

パンフレット・デザイン広告・名刺・封筒・伝票
新聞広報誌・ポスター・案内状・シール等



(有) 稲田印刷

〈本 社〉〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764
〈一宮店〉〒671-4133 兵庫県宍粟市一宮町須行名496
TEL (0790) 72-8600 FAX (0790) 72-8611

山陽 盃

清酒



兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造株式会社

旅行・観劇・航空券

すぐお応えいたします

神姫観光

〒671-2576 兵庫県宍粟市山崎町鹿沢68
(神姫バス山崎待合所内)
TEL (0790) 62-7588
FAX (0790) 62-7589

創業明治28年・さつき本舗

四季の菓子

御遠物・おみやげ・お茶うけに、四季折々の
真心こめた手づくりの御菓子を

御菓子司 あらき

本 店・播州山崎町さつき通り (電) 62-0170

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL 620036

呉服とジュエリー



本店 本町(さつき通り) 62-1680
咲ランド3F呉服のとくさや 63-0568
" 2Fジュエリーとくさや 63-0557

きれいなカラープリントの店



コーエーカメラ

本店 宍粟市山崎町東鹿沢 26-3 ☎ 62-2089
フリーダイヤル ☎ 0120-440-990
FAX 0790-62-7429
咲ランド店 TEL 0790-63-0533

心のゆとりのおてつだい

安井書店

YASUI BOOKS

本 店 TEL (0790) 62-0700
さつき通り FAX (0790) 62-2117
ブックランド店 TEL (0790) 64-2051
山崎町中井 FAX (0790) 64-2052